

読書通信

第7号
発行人: amagata

愛知県が舞台の小説

もうすぐ古典の授業で、『伊勢物語』の「東下り」をやります。愛知県知立市が舞台です。他にも愛知県が舞台になっている文学作品がいくつかあります。まずは夏目漱石「三四郎」です。主人公の三四郎が郷里の熊本から上京する途中で名古屋で一泊します。

しばらくすると「名古屋はもうじきでしようか」と言う女の声があった。見るといつのまにか向き直って、及び腰になって、顔を三四郎のそばまでもって来ている。三四郎は驚いた。「そうですね」と言ったが、はじめて東京へ行くんだからいっこの要領を得ない。

「この分では遅れますでしょうか」
「遅れるでしょう」
「あんたも名古屋へお降りで……」
「はあ、降ります」

この汽車は名古屋どまりであった。会話はすこぶる平凡であった。ただ女が三四郎の筋向こうに腰をかけたばかりである。それで、しばらくのあいだはまた汽車の音だけになってしまふ。

次の駅で汽車がとまった時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言いだした。一人では気味が悪いからと言って、しきりに頼む。三四郎ももともとだと思っただけでも、そう快く引き受ける気にもならなかった。なにしろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇したにはしたが、断然断る勇気も出なかった。まあいいかげんな生返事をしていた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

この後、三四郎はこの女と同宿するのですが、……。翌日、女は四日市方面に、三四郎は東京へ向かった。

「読書の記録」より 【太宰治「桜桃」】

▽短編小説の第三弾は太宰治「桜桃」です。「子供より親が大事、と思いたい。」という言葉が妙に頭に残っています。毎年六月十九日には太宰の墓前で「桜桃忌」が催され、いまでも多くのファンが集っています。その日は太宰の誕生日かつ、遺体が発見された日です。

▽一見幸せそうな家族、夫婦をこの作品の中では、より深い所まで書かれており、特に夫婦間の心情は、傍から見ただけでは大違いのものだと捉えることができた。なんともいえない家族のディープな所が描かれている作品だと思った。(K・M)

▽昔の時代の父というものは、もつと頑固というか威厳のあるものだと思っていたが、この物語に出てくる父はいつも周りの機嫌ばかり気にしているし、母にも口論で勝てないので、なんだかたよりない父だなあと思った。(J・I)

▽亭主関白な時代でも、討論を避けるために、引込む姿が優しさなのか、臆病なのか複雑だった。(A・O)

▽「子よりも親が大事」という文が印象に残った。自分が親の立場になったら子供のことをどう思うんだろう。(K・W)

▽話し言葉で書かれていたの、読みやすかった。(N・I)

** ** *

□ クラス文庫より □

「博士の愛した数式」



小川洋子

第1回本屋大賞受賞作品。交通事故の後遺症で記憶が80分しか持続できない元数学科博士とシングルマザーの家政婦とその息子ルートとの交流が描かれた作品。

この作品を読んで、数式の美しさ、数字の奥深さを知りました。いままでつつけんどんだった数字が優しく寄り添ってくれるような存在になったように感じます。

《冒頭と結び》

「彼のことを、私と息子は博士と呼んだ。そして博士は息子を、ルートと呼んだ。息子の頭のとつぺんが、ルート記号のように平らだったからだ。」

(中略)

「マウンドに漂う土煙の名残が、ボールの威力を物語っている。生涯で最も速い球を投げていた江夏だ。縦縞のユニフォームの肩越しに背番号が見える。完全数、28。」

クラス文庫、4冊追加

青山文平「つまをめとらば」
高橋秀実「弱くても勝てます」
吉田穂波「『時間がない』から、なんでもできる！」
アーセン・ベンゲル「勝者のエスプリ」

📖 後記 📖

晩秋、今時分の京都は時雨れることが多い。ちよつと曇ってきたかなと思うと、細かい雨がしとしとと降ってきた。紅葉、お祭りなど華やいだ雰囲気、観光客も多いのですが、それがかえって明暗を増幅させ、もの悲しくも感じられます。そんなときは、カフカ。灰色の不条理な世界にどっぷりと浸りたい。